

# 鹿沼に生きた人 生きている本

第7号

～川上澄生熱愛者、長谷川勝三郎～



私の郷里鹿沼市には、なくなった父が作った「掬翠園」という小さな庭があった。これを記念して千社札を作り、家人が神社仏閣に参詣した時に、これを貼る習慣があった。

私が大正 13 年に、宇都宮中学に入り、1 年生で、日光に遠足に行ったときに、私はこの「掬翠園」の千社札を、一生懸命お宮に貼っていた。後から「千社札をはっているのかえ」と声がかかった。引率の先生からだった。この先生こそハリさん事、川上澄生先生であった。ひとことふたこと先生とお話をして「君こんなの好きならば一度遊びに来てみなさい」と言われたが、これが先生と私との運命的な出会いであった。

「澄生さんと私」より

2024 年 4 月

小さな旅クラブ 鹿沼

## まえがき

版画家には三つの<sup>わざ</sup>技が必要である。一つは原画を構想して描く、という芸術家としての技、一つはさまざまな種類、製品のある彫刻刀を選び使いこなして版木に彫る、という彫師としての技、そしてできた木版に絵の具を塗って印刷する、摺師としての技である。

書道でもそうである。お手本を見て書いたとしても、10枚書いても20枚書いても、これは、という満足できるような作品はなかなか出来ない。摺物でもそうであろう。たとえ印鑑や社判を押印するときでさえ、度々インクのむらが生じてしまう。ましてや木版の摺り工程でむらが起こるのはたびたびで、欠点のない、完成度の高い作品はなかなか生まれない。多重刷、多色刷の版画ではなおさらである。展覧会では、このような完成度の高い、最高の作品が出品されるのである。

長谷川勝三郎は恩師川上澄生の弟子第一号になり、版画の手ほどきを受けた版画家である。澄生の勧めで、東京高等工芸学校（現千葉大）に入学、卒業後は東京日日新聞社（現毎日新聞社）に入社、40年にわたって新聞印刷に従事した。その間、特に展覧会出品作を中心に、質の高い澄生の作品を蒐集していた。それは師に対して控え目ではあったが、十分な対価を支払うことにより、澄生の経済を助けていたのである。

それらの作品は現在、鹿沼市立川上澄生美術館に収蔵されている。川上澄生美術館の誕生はこの「長谷川勝三郎コレクション」の存在によって実現したのである。川上澄生と長谷川勝三郎。人の歴史は出会いによって方向づけられ、展開するものである。（阿部良司）



川上澄生「男体山雪景」

① 長谷川勝三郎唯一（？）の著書から

長谷川勝三郎『澄生さんと私』（こつう豆本 124）より  
（平成9年1月30日・日本古書通信社発行）

川上澄生さんと私

私の郷里鹿沼市には、なくなった父が作った「掬翠園」という小さな庭があった。これを記念して千社札を作り、家人が神社仏閣に参詣した時に、これを貼る習慣があった。

私が大正13年に、宇都宮中学に入り、1年生で、日光に遠足に行ったときに、私はこの「掬翠園」の千社札を、一生懸命お宮に貼っていた。後から「千社札をはっているのかえ」と声がかかった。引率の先生からだった。この先生こそハリさん事、川上澄生先生であった。ひとことふたこと先生とお話をして「君こんなの好きならば一度遊びに来てみなさい」と言われたが、これが先生と私との運命的な出会いであった。



その後先生の止宿先、鶴田駅前の下宿を訪ねた。6畳と4畳半の家で玄関もなく、廊下の硝子戸をあけて座敷にあがる。先生の座る一人分の空地があるだけで、あとは、本、本、本、コーヒー茶碗やら、身の廻りの物で雑然としている。部屋に張ったひもには、洗濯物がかかっている。ここでコーヒーをご馳走になり、版画を見せてもらった。初めてみる先生の版画、美しく、まるで詩みたい。一目見て、とりこになってしまった。

版画を教えて下さいと強引に弟子第1号となった。あとでこの家こそ「朴花居」という名前であることも分った。

先生の本職は、英語の教師、放課後「朴花居」を訪ね版画の手ほどきをうけた。いつのまにか数人の友達が版画を試みるようになり、この連中が集まって自作の作品を持ち寄り、版画集「刀」を作ろうということになった。皆、先生の作品が欲しいばかりであった。たしか大正15年の頃だったと記憶している。「刀」には私が中学を卒業しても、後輩の者がうけつぎ昭和7年第13号まで続けられた。

私が宇中を卒業する時に、東京で版画などを教える学校があるという先



東京高等工芸学校時代  
(1930~33)

生のすすめで、東京高等工芸学校（今の千葉大学）の印刷工芸科を受けることになった。3年間の学校生活では印刷全般の勉強をした。卒業の時、東京日日新聞（毎日新聞）に、中里介山の「大菩薩峠」がのり、石井鶴三の挿画に感激、ブラック・アンド・ホワイトの印刷は新聞だと、東京日日を受験して合格、爾来40年に及ぶ新聞社生活を続けたが、これらすべて先生の影響であると言っても過言でない。

宇中以来、ずっと先生との交友関係は続きその間に、私もどうやら一人前の社会人となって、少しずつ、先生の生活に、若干でも、お手伝い出来るようになった。

先生も英語教師の生活に、色々な波乱があった。戦争中の軍国主義に、嫌気がさして、昭和17年宇中をやめ、昭和20年には、奥様の郷里北海道白老に疎開、極寒の地の生活を続け、その後教え子のすすめで、昭和24年、再度宇都宮に戻り、今度は宇高女の先生となった。これも昭和33年先生を辞退し、その後は版画製作で身をたてる事になった。

先生は、青山学院卒業後、父のすすめで、アメリカ・アラスカを、1年間放浪し、缶詰工場の工具になったりして自活をしていた。その頃の詩とスケッチが後年の「アラスカ物語」となったのである。

帰国後2、3の職を経て、青山学院の先生の紹介で宇都宮中学の英語教師となった。

青山学院では、木口木版の創始者合田清の令息弘一さんと同級、この影響をうけて木版に興味を持ったとのことである。

この宇中時代に製作した版画は、まことにすばらしく枚挙にいとまがないが、主なるものをあげてみると、

「賭博者」（ロスアンゼルス国際版画展に出品）

「横浜山手図」「横浜海岸図」「春の伏兵」「異国 春光」「幻想の阿媽港」などがある。

「初夏の風」は大正15年第5回国画創作展に出品したもので、これを見た棟方志功はびっくりして、洋画家から版画家に転向したことは、天下に有名である。

この頃の作品としては、

「鬼ごと」「的 三部作」代々木の創作版画倶楽部から当時の版画家恩地孝四郎・平塚運一・深沢索一・前川千帆などと一緒に製作刊行した「新東京百景」には、澄生は「銀座」「青山墓地」「丸ノ内曇天」など数種の作品を作っている。

昭和 7 年「野球大会之図」をロスアンゼルス芸術オリンピックに出品。昭和 11 年には、「村童野球戯之図」をベルリン芸術オリンピックに出品。昭和 19 年、東京アオイ書房から刊行した「時計」は、非常時にかかる趣味的贅沢な本とは、何事かと栃木県特高係より大変なおしかりをうけたが、教え子の特高係長の計らいにより事なきを得たのであった。

北海道白老に疎開して、数年に亙っての、胆振国での生活では、更科源蔵と組んで「北海道絵本」を作る。また未知の詩人福永武彦の依頼を受けて「ある青春」の挿画を数葉画刻する。アイヌを主題とした詩画絵本「あいのもしり」「えぞがしま」を作る。王子製紙の依頼を受けて作った「画集 苦小牧」には澄生作品としてはきわめて珍しい製紙工場の多色木版画がある。

白老を出て、宇都宮に帰ってからも、製作意欲はいささかも衰えることなく、沢山の作品を残している。

また小出檜重の影響を受けて「ガラス絵」の製作を始めたほか、皮絵・焼き絵・木工品、益子に赴いては、益子焼に絵付けをするなど、ますます多彩な製作にはげんでいる。

昭和 34 年、著作「版画」の出版記念を兼ねて、日本橋白木屋で、東京での初めての個展を開いた。その時の発起人は、柳宗悦、浜田庄司、式場隆三郎などが名をつらねている。また同年、大阪三越にて、個展を開催した。当時私は大阪勤務であったので、先生を大阪に招き三越の近くの宿に泊っていただいたが、東京でも、大阪でも版画の売れゆきははかばかしくなく、お手伝いした私も費用の捻出に苦労した。

昭和 42 年、この年は、明治 100 年になるので、これを記念して、朝日新聞社が、「原色版明治百年美術館」という画集を出版した。これは明治 100 年に亙っての日本画、洋画、彫刻ですぐれた作品を製作した作家と作品を紹介したもので、版画家としては、小林清親・橋口五葉・山本鼎・恩地孝四郎・川上澄生の 5 人だけ、川上作品としては、代表作「南蛮船図」（近代美術館蔵）が掲載されている。当時生存していたのは川上さんだけ

であった。

昭和 46 年には、アメリカ・カリフォルニア大学のロバート・ハース氏が来日、親しく川上邸を訪ねて十数点の作品を求めて帰米した。翌年同大学が発行した「最近の日本版画号」には、多くのページをさいて川上澄生さんを紹介している。

昭和 47 年、最愛の奥様がなくなられた。これを追うように澄生さんは急逝、天国に召されて行ってしまった。私は、ただただ呆然とするだけであった。

昭和 48 年には、栃木県立美術館が朝日新聞社と共催で「川上澄生—その全貌展」が、翌年には、大阪阪神デパートにて同展開催、東京では、リッカー美術館で「川上澄生名作展」を開催、多くの愛好者によるこんでいただいた。

朝日新聞社からは、「川上澄生作品集」が刊行され、次いで昭和 53 年には、中央公論社より「川上澄生全集（全 14 巻）」が刊行された。

昭和 52 年には、NHK の日曜美術館で「私と川上澄生」と題し、作家永井龍男さんの解説が放送された。

以上申しあげたように、川上澄生さんは、全く無欲でただ楽しく作品を作るという事に終始し、版画・絵本・ガラス絵など、クリスマスカード・年賀状・書票など、無数と言ってもよい程の作品を遺している。

私は、大正 13 年、日光での偶然のめぐりあい以来、川上作品の「とりこ」となり、数十年に亘って、大勢の方々の支援を得て作品収集に寧日なき努力を尽してきた。

野球部長として無理をした体が、晩年リウマチに苦しみ、立ち居振る舞いにも不自由になられてからは、作品の額装・展覧会への出品、上京されてからのお伴などは、私の尊敬する友人・今村秀太郎さんと一緒に一切のお世話をした。そして展覧会に出品したすべての作品を譲り受けた。苦小牧・札幌の友人にも、白老で製作した版画以外の一点ものの収集を手伝ってもらった。永い年月の間に、拙宅の書庫に、あふれるばかりになっていた。

前述の福永武彦さんの初めての詩集「ある青春」を求めるのに何年かかったことか。また全く珍しく、むしろ「初夏の風」よりも稀少であると言われている「鬼ごと」を見付けるには数十年の月日と身の細まる想いをし

ていた。その「鬼ごと」を先年偶然にも銀座の画廊で発見、画廊の主人に懇請して頒けていただいた時には、とびあがるほどのうれしさが一杯であった。

こうして私が一生をかけて集めた川上作品が、鹿沼市の故稲川市長を始めとし、郷里の方々の熱望に応じて後世まで残ることになり「鹿沼市立川上澄生美術館」が建設されることになったのである。

私の本望これに勝るものなしの心境である。願わくば、鹿沼市民、栃木県民の方々の熱烈なご支援を切望する次第である。



## ② 長谷川勝三郎、恩師・川上澄生を熱く語る

### 澄生熱愛者の弁

季刊「銀花」1972 第 11 号・秋の号  
(昭和 47 年 9 月 30 日・文化出版局発行)

季刊「銀花」川上澄生追悼版  
(昭和 47 年 10 月 5 日・文化出版局発行)

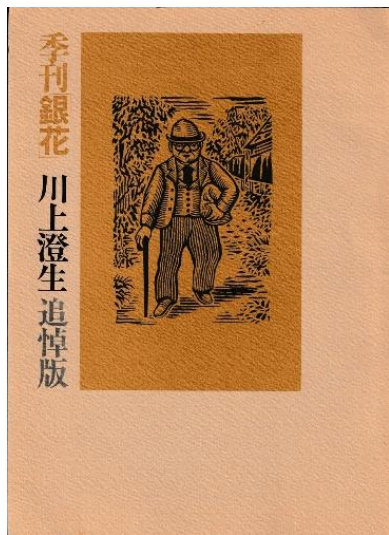
私は大正 13 年、宇都宮中学に入学して、川上さんを知った。英語を学び、版画の手ほどきを受けた。少年期から青年期に移ろうとしていた私は、川上版画に接し、その美しい画面の詩情とリリズムに圧倒され、それ以来すっかりそのとりこになってしまった。爾来今日まで川上作品を愛好し、愛蔵し、飽くことを知らない。

### 版画家川上澄生誕生

川上さんは明治 28 年 4 月横浜で生まれた。

お父さんは横浜貿易新報の主筆で、当時としてはハイカラな紳士であつたらしい。

3 歳か 4 歳のころに東京に引っ越し、東京の下町を転々と移り、青山師範の付属小学校を経て青山学院の中等科に入学した。同級に合田弘一さんがおった。彼のお父さんこそ、木口木版彫刻技術をフランスから持ち帰った有名な合田清氏である。この合田氏の知遇を得たこと、木下杢太郎の『和泉屋染物店』の口絵の安土桃山時代の南蛮人の風俗木版刷りを見たこと、



季刊「銀花」は「性別、年齢にこだわることなく、暮らしの中的美を求め、味わい深い人生に誘う趣味の雑誌」として1970年に文化出版局から発刊され、年4回、40年の長きにわたって日本文化の伝統や美を紹介し続けたが、2011年の第161号をもって休刊（実質廃刊？）となった。

その初期、1972年秋の第11号で川上澄生特集号（左図）が刊行されたが間もなく当の本人が逝去、急きょ「追悼版」（右図）が編集され限定1,000部で出版された。

このことが、つまりは版画家川上澄生誕生の発端である。

その後、一時、横浜に移った。東京の下町で川上さんの眼に映った明治末期、大正初期の風物、呼び声をあげて街を行く物売り、ほいほいとかけ声をかけて通りをすすむリキシャマン、横浜で見た異人館、エキゾチックな異人の姿、白浪をあげて進む蒸気船、すべて若い川上さんの脳裡に焼きついたのであろう。青山学院高等科での画会の仲間に、東郷青児、和田香苗、伊藤好朔の諸氏かおり、展覧会に版画を出品したり、音楽会のプログラムの表紙をデザインしたりした。

### 私はへっぼこ先生

「実は私はへっぼこ先生 私の履歴も変てこだ 給仕人だの居候 鮭罐詰製造人夫 看板の図案描き 羅紗問屋の番頭 それから学校の先生だ」

川上さんは、青山学院を出て、大正6年にお父さんのすすめで海を越え、アラスカ、北米に1年間漂流した。広漠としたアラスカ風景、白銀の雪、もくもくと天空に浮かぶ入道雲、身は鮭罐詰製造人夫であったが、青年川上澄生に映じたロマンティックな詩想、画想は、澁刺としたエネルギーと



化し、生涯を貫くヒューマニティを形成したのであった。

帰国後、羅紗問屋の店員をつとめたり、看板描きを手伝ったりした。

日本創作版画協会に木版画を出品、恩地孝四郎、深沢索一、前川千帆、平塚運一の諸氏と手をたずさえ、創作版画の制作を続けた。大正 10 年、宇都宮中学の英語教師として赴任、教育のかたわら、夜ともなれば黙々と版画の制作に打ち込んだ。

戦争を機に奥さんの郷里、北海道の白老に移り、苫小牧中学の講師をしたことがある。亡びゆくアイヌ民族をとりあげた詩画は、ロマンティスト川上澄生の面目をあますところなく伝えてくれる。

再度、宇都宮に落ち着いてからは、もっぱら版画の制作に従事、今日に至っている。

### 絵本の元祖

今日までに制作された版画は、大小あわせて 2,000 点を下るまい。

特に昭和 2 年、33 歳の時、年齢にちなんで 33 部作った『青髯』は川上澄生の傑作であり、その詩画は今日に至るまで高く評価されている。これは刊行絵本の元祖ともいわれるものである。

その後『ゑげれすいろは』『伊曾保絵物語』『変なりードル』『少々昔噺』『りいどる絵本』『らんぷ』『安土の信長』『南蛮船記』『しんでれら出世絵噺』『南蛮竹枝』『あいのもしり』『えぞがしま』『二人連』『少年少女』『街頭人物図絵』をはじめ、数多くの著作を出した。日本愛書会から刊行した『時計』『あらすか物語』は後世に残る最大傑作である。両著とも志茂太郎氏の執念の発刊であり、造本の神様だけにのみ許される超豪華本として、愛好家にとって垂涎の的と申しても過言ではない。

昭和の初めに神戸の「版画の家」から 4 種の画集が出ている。大正末期昭和初期の川上さんの作品集である。詩画集の中には「はつなつの風」「顔」「風船乗」があり、美しい画と限りない恋慕の情はすばらしいハーモニーとなって、リリズムとロマンを形成している。別の画集の中の「絵の上の静物」は代表作の一つである。

昭和 4 年、創作版画倶楽部から刊行された「新東京百景」は当時売れっ子の版画家を網羅しての頒布会であるが、この中にも数点川上作品があり、「丸の内曇天」「銀座」は美しい。銀座の版画荘、宇都宮の羅曼洞、札幌の青盤舎からも若干の絵本や画集が刊行された。最近では宇都宮の川上澄生

版画頒布会より、「明治調」「南蛮調」「新旧自選集」「女とランプ」が各 10 点ずつ頒布されている。このほか、東京有楽町の吾八からも刊行絵本が時おり配頒されているが、いずれも限定部数のため入手はきわめて困難である。

### 川上版画の魅力

川上版画の魅力はどこにあるのであろうか。「私の意識するエキゾティシズムは、西洋そのものに対するものではない。明治文化のちぐはぐにして安心出来る特異なる詩情に対する郷愁である。日本人の眼を以て日本に対するのである。即ち山高帽子に二重廻しを着て靴をはいて居る人は父の姿である。袖口から手を出さないで胸を抱いて居るような手つきをして丸髻に結って西洋風の背景の前に写真に写って居る人は母の姿である」

澄生自身もいっているように、とりあげられるモチーフは、西洋と日本のミックスされた、一見不安定に見える中にも安定した“芙”の追求であろう。

その中には、文明開化の黎明である異国ポルトガルとの交易の図、波をけって走る南蛮船の図、蝶々さんをおもわせる長崎での和洋混成の風物画などのいわゆる“南蛮調”のものと、文明開化を背景とした明治時代の諸々の風俗をテーマにとりあげたいわゆる“明治調”のものに分けることができる。いや、単にこれだけではない。身近の愛すべきすべてのもの、すなわち時計、パイプ、ランプ、簪、鉢、着せかえ人形などが画材となって、ほほえましいテーマを奏でてくれるのである。

「あなたの作品は芸術的にも素晴らしいが、日本とポルトガル両国の相互理解をおし進めるうえでも貴重なものだ」

昭和 42 年 7 月 5 日、南蛮画を 50 年余りにわたって画刻したという功績のため、川上さんは当時のポルトガル大使、アルマンド・マルチンス氏から表彰をうけた。その表彰式と大使との交歓風景は、NET モーニングショーで放映され、川上ファンを喜ばせたものであった。

### 世評

柳宗悦は「工芸」で次のように述べている。「私はいつも思い出したように、川上君の絵本や版画を、書棚や引出しから出して眺めるのです。それは私に楽しむ世界を与えてくれるからです。雑事の多い私は、川上君のお蔭でしばしば時間を忘れる恩恵に浴しているのです。見ていると楽しさや

親しさや面白さが静かに私に近づいて来るのです。時としては微笑まずにはいられません。私は一緒になってその絵本と遊ぶことができますのです。美には色々の面があるでしょうが、こういう境地を示すものがあるのは有り難いと思います。私は川上君の作で、人生へのある見方を教えられるのです」

棟方志功氏は同じく「工芸」で、

「国画創作協会の日本画部に陳列されてありました川上澄生氏の“はつなつの風”という版画を見て、版画は立派な仕事だと知りました。……“はつなつの風”を観た日から、私の版画は始まったのでした。川上澄生氏の版画を通じての私の版画は、幾回となく、その形態を変え、何時となく動き、騒ぎ、身の程を知らずな時と版画とに、今までを来ました。川上澄生氏から受くる恩義は、如何に深くして底多いものか言葉に出来ません」

川上さんは版画の他に、ガラス絵、革絵、焼絵、染色などバラエティのある作品をものにしている。

昭和 23 年北海道帯広の疎開先で、見ず知らずの川上氏に詩稿を送り、承諾の返事も来ないうちに、表紙絵、口絵、挿絵の版木を送ってもらい、飛び上がらんばかりに喜んだ福永武彦氏は、すばらしい装画を得て『ある青春』を発行した。この限定特装本は氏の処女詩集ともいべきもので、福永ファンにとって珠玉中の宝石である。福永氏は、最近、吾八より刊行された『川上澄生硝子絵集』に次のような述文を書いている。

「川上澄生のような独自の世界を持つ版画家が肉筆画を物する時に、油絵でもなく日本画でもなく、この硝子絵という当今さっぱりはやらないジャンルだというのが面白い。私は硝子絵の沿革や技術についてはまったく無知だが、川上さん固有のノスタルジックな風物を描くために、これほどふさわしい材質はないように思う。不透明で平板な泥絵具の感じが、異邦的、文明開化的、明治的といった情緒をかきたてるようで、川上さんらしい稚拙な味わいを出すのにうってつけである」

川上さんは単に絵とか詩とかに特異の才能があるだけでなく、その文章は、美しい画像を描き出してくれる。永井龍男氏は『石版東京図絵』の中で、川上さんの文章に対して、「川上さんの少年時代の日日は、たのしさにみちていたに相違ない、悲しみとか淋しさというものは、かげりもなかったようである。このことは、川上さんの絵に、大きく影響していると思わ

れる。『明治少年懐古』は、明治の末の東京を子供ごろのまま絵と文で表現した傑作である。川上さんは、私より十位上の兄貴分に当るが同じ東京育ちであることもあって、この本は私の年来の愛蔵書である」

先年、川上版画の蒐集のため、アメリカのカリフォルニア大学より来日したロバート・ハース氏は同大学美術館発行の「最近の日本版画号」に川上氏の作品をとりあげて、

「氏の作風は誰彼にも一服の茶とはゆかないまでも、浮き世を具象化する以外にもたくさん日本が存することを理解する者にとっては、現代日本版画の原点を知り得る心そそる啓蒙的でユニークな、かつうれしいものである」と述べている。

### 川上版画の技法

技術的に見た川上版画は、どんなものであろうか。浮世絵版画の彫師は、小刀で画線になぞらえてのみを入れ、すき間をさらってゆくという技法をとり、数多くの創作版画家もこの方法に従うのが常であるが、川上さんは駒スキと呼ばれる丸のみを巧みに使って画線にそって彫ってゆく、すなわち丸のみを絵筆にかえて描き彫りをするという方法をとったものが多い。丸のみの使い方では、当代随一といわれている。

烏山和紙を好んで用いているが、黒のつや紙に油絵具を使って特殊の効果をあげているもの、絵具を用いないで、いわゆる型刷りをしてレリーフに浮かび出したりしたもの、画面の静物などに光沢ニスを塗ったりしたもの、墨刷りだけで手彩色したものなどがある。

川上さんの絵本に、詩や短文を刷り込んだものが多いが、これは川上さんが木活字を一字一字彫っておき、これを鉛活字のように組み合わせ、画面に組み込むという手数をかけたものである。『南蛮船記』『南蛮竹枝』『幻燈』などはその代表作である。

川上さんは一作一作にあらゆる努力と工夫を投入する。たとい小さなエクスリプリスといえども、手を抜いたり、ゆるがせにしたりしない。その真剣な制作態度にはまったく頭の下がるばかりである。

先年、朝日新聞社が明治 100 年を記念して、原色版・画集『明治百年美術館』を刊行した。これは明治以来の歴史に残る、日本画家、洋画家、版画家、彫刻家の作品名鑑であるが、版画家として登場している方々は、小林清親、橋口五葉、山本鼎、川上澄生、恩地孝四郎の 5 氏にすぎず、現存

者としては川上さんだけである。偉大なる版画家である。

(筆者は元毎日新聞社取締役)

### ③ 長谷川勝三郎の熱き師弟関係と美術館誕生について長男が語る

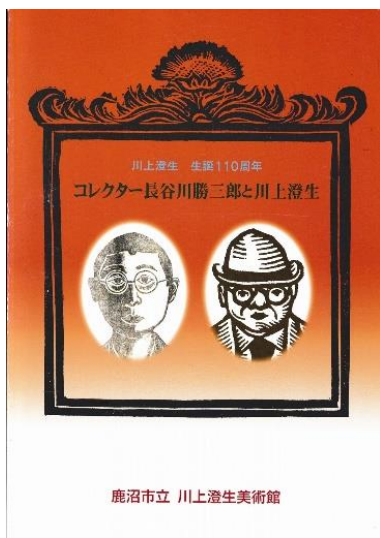
川上澄生誕生 110 周年 コレクター長谷川勝三郎と川上澄生  
(2005 年 10 月・鹿沼市立川上澄生美術館発行)

#### 川上澄生と長谷川勝三郎

長谷川勝朗

父、勝三郎は明治 45 年 2 月 9 日に栃木県鹿沼で麻問屋を営んでいた唯一郎の三男として生まれた。唯一郎は一代で財をなし、自宅に日本画家の木村武山、小杉放庵、清水比庵らを招き親交もあったと聞いている。また「掬翠園」という庭園きくすいえん（現在は鹿沼市屋台のまち中央公園になっている）を造り、母屋に隣接している阿弥陀堂の前の池から庭園の中央には川が流れ、いくつもの大きな石橋がかかり、庭園には茶室があり、石灯籠が点在し、なかなか風情のあるものであった。現在もコンパクトになってはいるが当時の姿を偲ぶことができる。父の兄、栄一郎（黙念・故人）は文化人であり俳句などを嗜み、また木喰仏の研究家として知られている。姉、フミ（宗召・故人）は茶人で掬翠園の中にある観瀾居かんらんきょ（茶室）で亡くなるまで茶道を教えていた。芸術好きだった祖父の血を父のみならず、伯父、伯母も多分に引継いでいたことがわかる。

川上澄生先生と父、勝三郎の出会いは、今からちょうど 80 年前の大正 13 年であった。父が宇都宮中学に入学した年、日光へ遠足に出かけた時の事であった。自宅の庭園「掬翠園」を記念して作られた千社札をお宮に父があちこちに貼っていると、引率されていた川上先生から「千社札をはっ



ているのかえ。君こんなの好きならば一度遊びに来てみなさい」と声をかけられた。父は度々この運命的な出会いをよく私に話してくれた。その後、父は宇都宮中学（現在の宇都宮高校）のある鶴田駅近くの先生のお宅に伺い、川上版画に出会うのである。まだ少年だった父は先生のカナダ、シアトル、アラスカなどの滞在経験から異国の風景や男女が肩を抱き合い、あるいは腕を組みながら歩いている作品、先生の初めての南蛮物の作品である「紅毛人之図」「紅毛女人之図」、また詩人でもある先生の、愛する人への想いが大胆に詩われている「うなち」などを見せていただき、ひと目で先生の作品のとりこになってしまったのである。当時ハイカラであったコーヒーも生まれて初めてご馳走になり、先生の作品やお話を聞いて強烈なカルチャーショックを受けたに違いない。そこで、すぐさま先生に弟子入りを哀願し、版画の手ほどきを受けるのである。その後、学校の帰りに先生のお宅に何人かの版画好きの少年達が集まり、自分達の作品を持ちよったのをきっかけに、版画集『刀』が創刊された。『刀』の中に父の作品も何点かふくまれている。宇都宮中学を卒業する時、東京で版画などを教えてくれる学校があるという先生のすすめで、東京高等工芸学校（現在の千葉大学）の印刷工芸科に入学した。そこで印刷全般の勉強をして、東京日日新聞社（現在の毎日新聞社）に入社したのである。もともと、商人の家庭に育った父は、川上先生との出会いがなければ、印刷人としての職業についていなかったのではないだろうか。

私が初めて川上版画を見たのは、物心ついた頃、自宅の応接間に飾ってあった「あぐえまりあ あぐえ 海の星」という作品だった。海原の左右に南蛮船が浮かび、中央の空中には雲に乗っている大きなマリアさまがイエスキリストであろう赤子を抱き、その両脇には雲が浮かび、翼を持つ天使が飛んでいるという図である。何故その作品を鮮明に憶えているかというと、当時はその作品が目に入る度、ただただ恐ろしく恐怖感で一杯になったからだ。夜、明かりの点いていない応接間に入る事さえ出来なかった。マリアさまのお姿はまことに大きく、顔は小さいのに大きすぎる手、まどっている服装はというと、釈迦如来の立像によくある袈裟のようなものなのだが、さながらそれは骸骨のように見えた。また空中に飛んでいる翼をもつ天使は真正面に描かれており、顔に翼が直接生えているように見える

ので化け物のようで、マリアさまに抱かれているキリストは恐ろしい怪物に捕らえられた子供のように見えた。その後、「あぐえまりあ」から「蛮船入津（群像図）」に掛けかえられた。「蛮船入津」は、横長の比較的大きな作品で額の中の版画の周りには、父が何処からか見つけてきたのか鮮やかなペルシャ更紗で表装されていた。今思えば、版画の構図にあるような異国からのおみやげ品の一つを表装したかのように作品と額装が見事にマッチしていた。ともあれ恐ろしく思えた作品から色彩豊かな作品に替わったことで、子供だった私も応接間への恐怖感から逃れることが出来た。この「蛮船入津」は、父も相当気に入っていたとみえ、その後何年も飾られていた。

父は川上先生との大正 13 年の運命的な出会いから、先生がお亡くなりになるまで、お付き合いをさせていただいた。その間、展覧会に出品された作品はほとんど引取らせていただき、また全国の古書店や画廊などで先生の作品を収集した。ほんとうに、色々な意味で大きなエネルギーを要したのではなかったかと思う。私が中学生になる前に、日本橋に当時あった白木屋というデパートで開催されていた先生の展覧会を父に連れられて行ったことがあった。そこで、私も先生の多くの作品に触れることが出来たのだが、先生の作品を自宅で数多く目の当たりにしたのは高校生になってからだ。ある晴れた日、虫干しでもしようと思ったのだろう、押し入れの上の戸棚から大きな手製の木箱を取り出し、その中の数えきれないくらいの作品を見せてもらった記憶がある。その時は先生の作品の魅力よりも父の川上コレクションへの執念、情熱に父の偉大さを感じた。また父は、川上作品以外にも自分の気に入った作品を収集していた。それほど点数は多くはないが、岸田劉生、梅原龍三郎、棟方志功、岡鹿之助、熊谷守一、武井武雄、竹久夢二、恩地孝四郎、永瀬義郎、谷中安規など。それらの中には、貴重な作品もあるようだ。

父自身の作品について思い出す事は、父が学生の頃にお茶の水の聖橋を構図として彫った版画を、神田のある画廊の店先で偶然に見つけた。お店の人に「この版画の作者はどなたですか？」とわざと尋ねたところ、店の人は答えられなかったので、父は「たいした人の作品ではないのでしょうか」と言って、自分の版画を直切って買って来たという笑い話がある。その作品がどうして神田の画廊にあったのかは、父も知らなかったしいまだに謎

である。父の版画には、片隅に「LVR」とサインが刻まれているものもある。子供の頃に「LVRって何？」と尋ねた事があったが、それは、「Long Valley River 長い谷の川で長谷川だよ」と教えてくれた。私も小学生の頃に学校で画いた絵にLVRとサインし、得意になって長谷川の意味を先生に話したことがあった。ちょっと横道にそれてしまったが、「聖橋」にもまぎれもなくLVRのサインがある。また同人誌『刀』の申にある「静物」、この版画は、以前筑摩書房の編集の方が、栃木県立美術館で見て、記憶に残っていたものと思われ、父が他界して1ヶ月もたたぬ頃に、編集の方から、ちくま学芸文庫『銀座』（松崎天民著）のカバーの装丁に「静物」を使わせていただきたいと、お電話をいただいた。父は、銀座大好き（特にネオンが点くと）人間であったし、著者の松崎氏は新聞社の記者であったそうで、父が亡くなった直後に版画家でもない素人の作品を載せていただいた事は、図らずも父も新聞社出身であり何か因縁じみたものを感じる。

私が知っていた父の版画は、「聖橋」「静物」の他にあと2~3点くらいで、いずれにせよ学生時代の趣味程度だったことでもあり、ほとんど残っていないのかと思っていた。

平成13年8月に父が他界して今年で丸4年経ったが、いまだに書庫の整理も手つかずにほとんどそのままになっていたところ、川上澄生美術館の福田徳樹館長から、川上澄生生誕110周年を記念して、10月から「コレクター長谷川勝三郎と川上澄生展」を開催したいとお話をいただいた。コレクションから何点が展示をされたいということで久しぶりに書庫に入った。書庫の奥の高いところに以前押し入れの上の棚にあったような木箱があり開けてみると、先生との出会いのきっかけとなった、あの「掬翠園」の千社札をはじめ、父の版画が数点でてきた。それらの中の1つに、女性とそのやや後方に父であるのか男性がいる図で、

御願ひ 貴女様の為ならば 何事でも致します故 何卒お見捨なき様  
伏して願ひ申し上げ候

と詩が刻まれている（P86 図版№114）。詩というよりも片思いの女性に送ったラブレターのようにも思える。墨一色の版画であるが、川上先生の作品「顔」を思いうかべてしまった。その他どれも先生の影響をまともに受けているなど思える版画ばかりであった。今回の展覧会で父の版画も片隅に展示していただければ、父も喜ぶのではないかと思う。



平成4年9月に川上澄生美術館が誕生するまでには、いろいろなことがあった。おそらく、オープン2年ぐらい前から父にコンタクトがあったと思う。2000点を超える川上作品を将来どういう形で残したらいいかを、父もだいぶ前から考えていたようだった。父の亡くなる何年も前のことだったか、父は新潟県柏崎市にある黒船館へ私を引き連れて、コレクションの先行きについてお話を伺いに訪ねたことがあった。黒船館は、呉服屋さんを経営している花田正太郎さん（故人）の川上コレクションを、ご子の直太さんが引き継ぎ、お店に隣接している土蔵を改修し、数多くの川上作品を公開展示している。版画作品もさることながら、美術館の名前にちなんだ南蛮物の肉筆など素晴らしい作品が数多く展示されている。それから何年か経って、現実には鹿沼市からのオファーがあった時、父は自分が必死に収集に努めた思い出深い作品を手放してしまうことに対しての寂しさなどもあり、かなり悩みつづけ、なかなか首を縦にはふらなかった。当時鹿沼市を代表して市の秘書課長であられた篠原光美さん（初代美術館事務長）、陶芸家濱田庄司先生のご子息であるガラス工芸家の濱田能生さん（美術館を飾るステンドグラスを制作）らが、美術館の青写真を持ち、父のコレクションの譲渡を説得しに度々自宅を訪れた。結局、お2人の並々ならぬ熱意と、父の生まれ育った郷里鹿沼市で川上作品を後世に残すのが最良の結論だと判断して承諾することになった。そのような経緯があり、ようやく川上美術館がオープンした。

父は名誉館長に就任し、側面からお手伝いするというで時間のあるかぎり美術館に出かけた。平成7年10月12日には、天皇皇后両陛下が美術館にお越しになり、初代の館長小林利延さんと共にご案内させていただいた。両陛下は、大変川上作品を気に入られ予定の時間をだいぶオーバーされお楽しみになられた。また父は来館者の方々に川上先生の人となり作品なりのいろいろな話をしに、美術館にでかけるのを楽しみにしていた。晩年は身体もままならず、それでもステッキを持ち私か父の身体をささえながら美術館に出かけると、着くなり急に元気をとり戻しはつらつとしていた。美術館の職員の人達の温かい出迎へと、大好きな川上作品に囲まれていることが、どんな薬よりも効き目があったようだ。

美術館には、来館者が自由に感想などを記せるノート「気促帳」がある。

父は美術館に行くとき必ず覗いていた。私もとなりで一緒に見ていたが、はるばる北海道、九州から来られた方々や、海外からの方の感想も記されており、初めて川上作品を鑑賞して、その魅力にすっかりとり憑かれてしまい、何回も足を運ばれた方も数多くいらっしやった。良いことばかりではなく、辛口の感想やご指摘ご意見は、今後の美術館の運営に大変参考になると、そんなお客さまの声も父は何気なくチェックしていたのだろう。

私も父と同様、印刷の仕事に就いた。凸版印刷が創立 100 周年を迎えた平成 12 年に、社会文化貢献の一環として、印刷博物館とクラシック音楽専門のコンサートホールを造った。現在、そのコンサートホールのトップホールに出向している。より良い環境の中で、アーティストのベストの状態をひきだし、お客さまに生の演奏を身近で聴いていただき、感動していただくことが私どもの指命である。まったく同じように、川上美術館も素晴らしい環境の中で、素晴らしい川上先生の作品を身近に接していただき、お客さまに感動していただけるように常に努力されている事と思う。この 9 月に美術館オープン 13 年を迎えるわけだが、そのような美術館に父のコレクションだった川上作品が、一個人の愛好家に死蔵されることなく、多くの人々に鑑賞していただき安住の地を得ることが出来たのは、大変喜ばしく思っている。また、川上澄生美術館にご尽力いただいている多くの皆様に対し、亡き父と共に深く感謝の意を表したい。

平成 17 年 5 月



#### ④ 長谷川勝三郎が作品を蒐集した綺羅星の如き版画家群

開館 20 周年記念特別企画展 創作版画の宝石箱  
川上澄生・武井武雄・川西 英・谷中安規…  
—コレクター長谷川勝三郎の眼—  
(2012 年・鹿沼市立川上澄生美術館発行)

長谷川勝三郎と創作版画の仲間たち

長谷川 勝朗

父、勝三郎は 1912 年（明治 45）栃木県上都賀郡鹿沼町（現・鹿沼市久

保町)に麻問屋を営んでいた唯一郎の三男として生まれた。唯一郎は 1873 年(明治 6)栃木町(現・栃木市)で生まれた。唯一郎が生まれた時は、既に父親は他界しており、唯一人の男の子ということで唯一郎と命名されたと聞いている。1879 年(明治 12)、6 歳の少年唯一郎は鹿沼町の村山商店に奉公に出された。荷車を引きながらいつも歩いている通りに大きな屋敷があり、自分も将来このような屋敷に住みたいと大きな夢を描いていた。1894 年(明治 27)、21 歳の若さで独立。鹿沼一帯も野州麻の産地であり麻商、長谷川商店を設立した。その後、東京神田に支店を設立するなど、商売は順調に推移し、特に第一次大戦では強くて丈夫な麻が軍需用品の一つとして盛んに出荷され大いに繁盛した。おかげで、はぶりも良く少年の頃に描いた夢であった邸宅を築くことができた。そこには、<sup>きくすいえん</sup>掬翠園という庭園があり、庭園の中には「<sup>けいうんきやう</sup>慶雲郷」「<sup>かんとうきよ</sup>観濤居」と呼ばれる建物がある。又、「りり堂」と呼ばれるお堂もあり、これは唯一郎が、日光の小来川の山奥に寂れていたお堂を移築したものである、このお堂は、1776 年(安永 5)頃に建てられたと伝えられている。



その後、東京神田に支店を設立するなど、商売は順調に推移し、特に第一次大戦では強くて丈夫な麻が軍需用品の一つとして盛んに出荷され大いに繁盛した。おかげで、はぶりも良く少年の頃に描いた夢であった邸宅を築くことができた。そこには、<sup>きくすいえん</sup>掬翠園という庭園があり、庭園の中には「<sup>けいうんきやう</sup>慶雲郷」「<sup>かんとうきよ</sup>観濤居」と呼ばれる建物がある。又、「りり堂」と呼ばれるお堂もあり、これは唯一郎が、日光の小来川の山奥に寂れていたお堂を移築したものである、このお堂は、1776 年(安永 5)頃に建てられたと伝えられている。

掬翠園は、当時、今宮町の「松華園」上材木町の「村山晃南荘」と並んで鹿沼の三名園の一つとして、日本画家の木村武山、洋画、日本画家の小杉放菴、晩年今良寛と呼ばれた歌人、書家、日本画家の清水比庵、そして、陶芸家の濱田庄司などが訪れた。唯一郎は教育もろくに受けていなかったと思われるが、俳句を嗜み数多くの文化人との交流があった。掬翠園の名付け親は洋画、日本画家、書家として知られている中村不折であり、「慶雲郷」の玄関には不折直筆の書が残されている。「掬翠」とは「翠」みどりを「掬」くみとるという意味である。現在は、屋台のまち中央公園の一郭にあり、鹿沼三名園の中で唯一現存しており、市の管理のもと、茶道、華道を始め、様々な文化活動に貸し出されている。

そのような環境の中、勝三郎が誕生。そして、1924年（大正13）宇都宮中学校（現・栃木県立宇都宮高等学校）に入学した。同年日光に遠足に行った時に、自分が刷った掬翠園の千社札（下図）をお寺やお社に貼っていると、引率していた先生、川上澄生の目にとまり、「版画が好きなら家にあそびにきなさい」と声をかけられた。その後、学校の帰りに鶴田駅前澄生宅を訪ね川上版画に出会うのである。掬翠園の千社札がきっかけとなった澄生と勝三郎の運命の出会い、そして澄生作品のコレクションにいたるまでは、「川上澄生さんの事」（『川上澄生全集』第3巻 中央公論社）と題して全文が転載されているので、ここでは詳細は省略させていただく。多少重複するところもあるがご容赦願いたい。

川上版画のとりこになった勝三郎は、澄生の弟子にしてもらい版画の指導を受ける。また版画の好きな仲間達が集まって、1928年（昭和3）澄生指導のもとに版画誌『刀』を創刊する。翌年第4号まで勝三郎が中心となり編集を担当した。宇都宮中学校卒業後も1930年（昭和5）通巻第8号迄毎号作品を発表している。さらに、宇都宮中学校在学中、札幌の詩と版画の同人誌『さとぼろ』にも版画を発表している。

1929年（昭和4）宇都宮中学校を卒業し、版画を教える学校が東京にあるとの澄生のすすめで、上京。1年浪人して翌1930年（昭和5）に東京高等工芸学校（現・千葉大学）印刷工芸科に入学した。東京では、神田美土代町のYMCAのアパートに止宿していた。後で述べるが、その頃に知り合った版画家が何人かいる。

東京高等工芸学校では木版は教えてはもらえなかったそうだが、デッサン、石版、エッチングなどの授業はあり、一通りの印刷技術を習得した。また学生仲間と版画集『刀画』、『BALEN』を創刊した。さらに、『版画』同人、『きくづ』、『版画 CLUB』、『版芸術』などにも作品を投稿発表して

いる。また澄生から紹介された版画家たちに自分の作品を見てもらい指導を受け、評価してもらったと言う。先輩の版画家たちの作品を多く所有していることから頒布会などで購入したものももちろんあるが、特に小品などはその頃、直接頂戴し



掬翠園の千社札

たのではないかと思われる。

当時、千葉県長生郡白潟海岸に唯一郎が別荘を所有していた。現在は白潟という地名はないが、調べてみると九十九里の白子町にあたる。たしかに白潟小学校など白潟の名前が残る公共施設が現存している。

勝三郎の次兄、善次郎はあまり身体が丈夫でなかったようで白潟に静養を兼ねて住んでいた。勝三郎も夏になると保養に行き、川西 英、大河内信<sup>ひで</sup>敬<sup>のぶ</sup>らから白潟の宛先に暑中見舞いのはがきが送られている。

余談ではあるが、その別荘で板前として住み込んでいたのは、料理研究家の田村魚菜であった。魚菜は、戦後東京自由が丘に料理塾（魚菜学園の前身）を開き、テレビなどにも出演、有名になった。さらにもう一つ余談。白潟の別荘に、まだまだ幼女だった女優中村メイ子さんが遊びに来ていたそう。彼女の父は作家の中村正常で、家族で保養に来ていたのかもしれない。父は彼女をおぶったり、遊んであげたことがあったと話していた。

次姉のふみ子（宗召）は茶道宗偏流の師匠で、掬翠園の『観濤居』に住んでおり、お茶の指導をしていた。また魚菜にお世話になり、ほぼ毎週水曜日に鹿沼から東京に出向き、魚菜学園でお茶を教えていた。

長兄の榮一郎（黙念）は家業を継いだ。また文化人でもあり、俳句を嗜み、円空仏とならび賞される木喰仏の研究者としても知られている。鹿沼市栢窪の薬師堂には、木喰上人が彫った薬師三尊と十二神将が祀られている。そこには「微笑は ほほえみを生む 春乃風」と薬師如来像を詠んだ黙念の句碑がある。

勝三郎が東京高等工芸学校卒業間近の頃、「東京日日新聞」に中里介山の小説『大菩薩峠』が連載されており、石井鶴三が挿絵を書いていた。勝三郎はその挿絵に魅せられた。その効果はすばらしく、新聞印刷こそ「ブラックエンドホワイト」の第一歩であり極致であると信じ、1933年（昭和8）東京日日新聞社（現・毎日新聞社）に入社した。

父は版画家たちと知り合ったきっかけなどほとんど話してくれなかったが、私の知っている範囲で何人かを紹介したい。

### 松村松次郎（生没年不詳）

松次郎は 1929 年（昭和 4）に素描社から創刊された『版画』同人の編集者

で、勝三郎は第 2 号から作品を投稿している。作品を発表している仲間たちに旭正秀、前川千帆、小泉癸巳男、恩地孝四郎、大河内信敬らがいる。勝三郎が松次郎から譲り受けた作品の一つにおそらく上野公園であろう満開の桜の中の花見で賑わう多色木版があるが刷りも美しく小品としては素晴らしい作品である。松次郎についての履歴など詳細が不明なので誠に残念であるが、『版画』同人第 2 号が発行された 1929 年（昭和 4）9 月には、東京市外矢口町蓮沼（現・大田区蒲田）の旭正秀宅に大阪から越してきて一時間借りしていたようだ。戦時中シベリアに拘留され、その地で没したのではないかといわれている。

### 旭 正秀（1900—1956）

勝三郎と正秀とは、前述したように、『版画』同人の仲間だった。父の所有している正秀の作品の中には、キリストを背負い川を渡る大男《聖クリストフォルス（多色刷）》、《キリストの磔刑（墨刷）》、《十字架を担えるキリスト（墨刷）》、《受胎告知（多色刷）》など、キリスト教をテーマにした図が多い。

ヨーロッパに木版が登場したのは東洋に比べればずっと遅く、1300 年代の後半頃だといわれている。ちなみに、制作年代が明確な世界最古の木版（印刷物）は、764 年（天平宝字 8）に孝謙天皇（後に称徳天皇）が国家安泰を願い作らせた「百万塔陀羅尼」の経文である。ヨーロッパ最初期の木版画はキリストや聖母、聖人などのキリスト教をテーマにした図が多く、現存しているヨーロッパの最も初期の木版に《聖クリストフォルス》（1420 年頃）がある。正秀もそれらのヨーロッパの版画を見たにちがいない。

### 小泉癸巳男（1893—1945）と大河内信敬（1903—1968）

癸巳男と信敬は、詩人早目泰とともに 1922 年（大正 11）雑誌『君と僕』を創刊。大変親しい仲であったと思われる。中学を出たての勝三郎は、大先輩の癸巳男から大変可愛がられたようだ。というのは、癸巳男と勝三郎から信敬に宛てたはがき（昭和 5 年 4 月 9 日及び翌 10 日の消印）を三木哲夫氏（兵庫陶芸美術館館長、川上澄生美術館木版画大賞審査委員）がお持ちで、私も拝見したことがある。その絵手紙の内容は、癸巳男が掬翠園の勝三郎のもとに宿泊し、「鹿沼大儘の邸宅 びっくりされるものばかり この図 竹の灯籠なり 風流なり」と竹の灯籠が描かれている。また、同じはがきの宛名面に「鹿沼掬翠園ニ

テ 癸巳男、勝三郎」とあり、「9日天気清朗 第2信より 日光電車内」と記されてあることから、翌日、日光へ出かけたのであろう。消印も日光とあり日光から投函されている。翌10日消印のはがきは3通ある。1通目は、癸巳男が描いた勝三郎の似顔絵。消印は神田であることからして、勝三郎が日光から帰京しすぐに投函したものと思える。2通目は、癸巳男が大きな茶瓶を抱いてプラットホームに落ちている図で「於小山駅 小泉老茶ビント心中ス 4月10日後日葬儀二奉ズ」とある。もう1通は、勝三郎が描いた、癸巳男の似顔絵で「小泉老臨終ノ頃 4月10日」と記されてある。いずれも東京に向かう途中で投函されたものと思われる。当時はあて先方面に向かう郵便車内で消印（鉄郵印）が押されることが多く、消印は東京宇都宮間となっている。想像するに2人は車中で酒でも飲みながら、大河内を驚かせてやろうということで書いたにちがいない。当時の癸巳男と勝三郎の悪ふざけの様子、そしてはがきを手にした信敬の驚いた様子がありありと脳裏に浮かんでくる。一番若造の勝三郎にとって2人は兄貴的存在だったのだろう。

### 谷中安規（1897—1946）

勝三郎が神田美土代町の YMCA のアパートに止宿していた時、安規は YMCA のすぐ近くの上田書店に店番のようなかたちで寄食していた。安規とは旭正秀の紹介で知り合いになったと聞いている。上田書店の近くに勝三郎がよく出入りしていたエトアールという喫茶店があり、そこで2人は時々会い、版画の話などをした。勝三郎が遊びで彫っていたエトアールのマッチラベルやクリスマスカードなども見せていたそうだ。安規は無類のコーヒー好きで、店で飲んだ後、必ず持参の数本のトックリにコーヒーをつめてもらい、寝ながらチビリチビリと飲むのが楽しみだった。安規の事を書いているどの本にもあるように、だらしないというか、かなり汚い格好をしていたため、YMCA の守衛にとがめられながらも勝三郎の部屋に上がりこんだ。また、勝三郎と会う時はいつもおなかをすかせており、度々トンカツやカレーライスをごちそうし、父の持っている安規の版画のほとんどは食事の代わりにもらったものと聞いている。その中に、木彫の《男性像》があるが、大変珍しく貴重なものである。

安規は、いつも永瀬義郎の『版画を作る人へ』という本を懐にもっており「永瀬さんの挿画のブラックエンドホワイトの作品はすごいすごい」と言っていた。墨の刷り方は、永瀬から手ほどきをうけており、安規の《自転車A》、《パイプ

をふかす犬》などの墨刷りの表現は、すばらしいものである。勝三郎も永瀬とは長いおつき合いで、永瀬が亡くなった後も、てる子夫人、ご子息の薫さんとも親しくしていた。また当時、無名だった安規の才能を見出し、援助した人物としても知られている版画誌『白と黒』の編集者、料治熊太は「安規は『版画を作る人へ』を読み、版の世界にはまだ新開拓の余地があることを知り、永瀬のことを、この世で出逢った只一人の師として、いつまでも忘れなかった」と記している。安規と勝三郎とのつき合いはほんの1年程度であったが、いつの間にか上田書店から姿を消し、その後会うことはなかった。

### 武井武雄（1894－1983）

勝三郎が、武井武雄という名前を知ったのは『コドモノクニ』の挿絵を見た小学生の頃であった。実際に武井とつき合うようになったのは、おそらく澄生の紹介で、勝三郎が社会人になってからの1935年（昭和10）頃である。その頃勝三郎は澄生とともに、武井が主宰する年賀状交換会「版交の会」のメンバーとなり、翌年の1936年（昭和11）の第2回まで参加している。

武井は、本の宝石と呼ばれている刊本作品を1935年（昭和10）～1982年（昭和57）の47年間に139冊もの刊本を発刊した。刊本を入手するには、親類とよばれる友の会のメンバーにならなければならないが、勝三郎は、1『十二支絵本』と2『雛祭絵本』の2冊をどういうわけか所持していなかった。なんとか入手することが出来ないかと長いこと案じており、ふとした機会に和時計の研究で有名な塚田泰三郎が6冊目まで持っていることを知り、澄生に何度もお願いしてとうとう入手することが出来た。澄生と塚田は、濱田庄司らと共に昭和の民芸運動を展開した仲であり、そんな関係が功を奏したわけである。3冊目の『諸国絵馬集』は1937年（昭和12）2月の発刊、その時勝三郎はすでに友の会のメンバーになっており、以降139全冊を入手している。139冊の刊本をよく見ると、様々な印刷手法（技術）が用いられ造られている。板目木版からはじまり、木口木版、合羽刷り、バリタイプ、エッチング、活版、凸版、オフセット、グラビア、石版、孔版、コロタイプなどなど。そして、武井は当時新しい印刷技術が開発されるとすぐに挑戦した。それらには、タンデムプリント、トランスアート、静電印刷、サーモプリント、ステレオ印刷などがある。まさに印刷の見本帳のような作品である。

また銅版絵本『地上の祭』は、武井が3年間の歳月を費やして1938年（昭



和 13) に志茂太郎のアオイ書房から発刊されている。武井が銅版を彫り、関野準一郎が銅版を刷り、写真植字は「株式会社写研」の創業者石井茂吉、オフセットと凸版の印刷は「凸版印刷株式会社」というメンバーで、異なった版式を駆使して造られた超豪華本である。製本は当時本の装丁や豪華本造りの名人といわれた中村重義が担当した。限定 200 部で限定番号も武井の文字で 1 冊ずつ印刷されている。また、本書には別途、和綴じ本の『銅版絵本地上の祭 愛蔵家名簿』があり、限定同番は誰の手元にわたったかわかるように、氏名が印刷されている。ちなみに勝三郎は 125 番。川上澄生、関野準一郎、初山滋なども名簿にある。

武井は、ミニアチュールも作成している。自作の手づくりの額におさまっているミニアチュールは可愛らしくすばらしい作品である。日本橋の白木屋（東急百貨店日本橋店と改称され、1999 年（平成 11）に閉店。跡地にはコレド日本橋が建設されている）で展示即売会が開催されると、数人のコレクターが午前 10 時の開店前から玄関に並び、開店と同時に階段を駆け上りお目当ての作品を買い求めた。余談であるが、美智子皇后（当時妃殿下）が武井に作品をわけてもらいたいとおっしゃったことがあり、「いや、一般の方と同じように階段を駆け上がってください」と言ったとか言わないとか、父から聞いたことがある。

### 川西 英（1894—1965）

川西英は、澄生の紹介で知り合ったようだ。1929 年（昭和 4）、中島重太郎の創作版画倶楽部から刊行された『版画 CLUB』に川西、澄生、勝三郎も作品を発表している。勝三郎は前年の 1928 年（昭和 3）から川西と書簡をとりかわしている。この企画展の担当学芸員臼井佐知子氏が川西と勝三郎との関係を詳しく考察しており、実際に作品とともに、書簡も何通か展示紹介しているので、細かいことは省略させていただく。川西のご子息祐三郎さんも 8 歳から父の手ほどきを受け、今や日本を代表する木版画家である。祐三郎さんの作品も何点か所有している。

その他、父はいろいろな版画家の作品を所有していた。その 1 人が山高登さんだ。山高さんの作品も澄生同様ノスタルジックで明治調の作品が多い。父が版画を彫らなくなっからは、澄生に年賀状を彫ってもらっている。

た。澄生の後には山高さんをお願いしていた。当川上澄生美術館では、本年10月6日(土)～11月4日(日)まで1階展示ホールで「山高登展一懐かしの都市風景」を開催する。是非、ご覧いただきたい。山高さんも楽しみにしていらっしゃるようだ。

父は生前、2,000点余りの川上澄生コレクションを行く末どうしたら良いか相当考えていた。保存管理の問題もあるし、処分して散逸してしまうのはもってのほかである。一個人が抱えこみ死蔵してしまうのは、澄生にとっても文化的にも損失である。ちょうど鹿沼市の強いオファーもあり、郷里に全点を提供し1992年(平成4)に鹿沼市立川上澄生美術館が誕生した。そしてこの川上澄生美術館を經由して各地の美術館に展開され多くの人々に鑑賞してもらい、澄生ファンが新たに誕生したことも事実である。

先日、世田谷美術館で銅版画の駒井哲郎展を見てきた。資生堂名誉会長の福原義春氏が蒐集した約500点の作品展で、この企画展の開催にあたって、駒井の全コレクションを世田谷美術館に寄贈された。福原氏の講演「コレクションを語る」も拝聴させていただいた。その中に「個人が所蔵することによって死蔵のようになってしまっている駒井作品を、社会的に共有することが私の願いだった。」とおっしゃっていた。私は、父が生前にまったく同じことを言っていたのを思い出し、福原氏の貴重なコレクションを世田谷美術館に寄贈されたことのみならず、講演でのお話に深い感銘をおぼえた。

私事ではあるが、私も父と同様に印刷関係の仕事に就いた。1969年(昭和44)凸版印刷株式会社に入社し、講談社、文芸春秋、主婦の友社など大手出版社の営業を担当した。したがって、印刷や造本の知識は多少なりともあるので、特に武井武誰の刊本作品や、銅版絵本『地上の祭』などは印刷人から見ると、物作りに対する並々ならぬ努力や根気、新しい印刷、造本技術への挑戦など困難な工程を克服し、それらの作品に携わった人々の真骨頂が見事に発揮されている芸術作品に思える。凸版印刷は、2000年(平成12)に創立100周年を迎えた年に、社会文化貢献の一環として、「印刷博物館」とクラシック専門の音楽ホール「トッパンホール」を設立した。祖父や父の血を引継いでいるのか、美術や音楽が好きな私は、幸運にもどちらの職場でも仕事をする事が出来た。近い将来、父の遺した武井武雄の『刊本』、『地上の祭』は印刷博物館に寄贈しようと思っている。

最後に、今年 2012 年は、父勝三郎の生誕 100 周年にあたる。また川上澄生美術館の開館 20 周年にもあたる。この記念すべき年に、今回このような創作版画家の企画展が開催され、父も喜んでいると思う。私も心から感謝の念につかない。

平成 24 年 5 月

故人は敬称を略させていただきました。また、生没年を記しましたので参考にしていただければ幸いです。

石井鶴三 (1887-1973)	石井茂吉 (1887-1963)
恩地孝四郎 (1891-1955)	川上澄生 (1895-1972)
木村武山 (1876-1942)	小杉放菴 (1881-1964)
駒井哲郎 (1920-1976)	清水比庵 (1883-1975)
志茂太郎 (1900-1980)	関野準一郎 (1914-1988)
田村魚菜 (1914-1991)	塚田泰三郎 (1897-1985)
中里介山 (1885-1944)	中島重太郎 (1887-1974)
中村不折 (1866-1943)	永瀬義郎 (1891-1978)
初山 滋 (1897-1973)	濱田庄司 (1894-1978)
前川千帆 (1888-1960)	料治熊太 (1899-1982)
長谷川唯一郎 (1873-1958)	長谷川榮一郎 (1900-1974)
長谷川善次郎 (1903-1946)	長谷川ふみ子 (1909-1978)
長谷川勝三郎 (1912-2001)	

## 参考文献

長谷川榮一郎『父を語る』(耳澄居、1959年)

「鹿沼見て歩きのホームページ 掬翠園」

加治幸子編『創作版画誌の系譜』(中央公論美術出版、2008年)

『印刷博物誌』(凸版印刷株式会社印刷博物誌編纂委員会 紀伊國屋書店、2001年)

『谷中安規と料治熊太』(渋谷区立松濤美術館、1996年)

永瀬義郎『放浪貴族』（国際 PHP 研究所、1977 年）

永瀬義郎『版画を作る人へ（復刻版）』（夢譚書房、1993 年）

長谷川勝三郎「谷中安規さんとの事」

（「谷中安規の版画」展目録 鹿沼市立川上澄生美術館、1999 年）

長谷川勝三郎「思い出すままに」

（「刊本作品親類通信」36 刊本作品友の会、1975 年）

長谷川勝三郎「川上先生と私」（「川上澄生遺作版画頒布会月報」第 4 号

川上澄生遺作版画頒布会、1973 年）

## ⑤ その後の師弟関係と美術館の着想まで

小林利延『評伝 川上澄生』より

（下野新聞創刊 120 周年記念出版）

（2004 年 3 月 7 日・下野新聞社発行）

### 第二〇章 川上澄生美術館の誕生

#### 弟子にして後援者 長谷川勝三郎



風となって去った芸術家を、この世に止どめておくことは出来ないのだろうか。それを可能にする絆は残された作品ではないか。それが澄生と私たちを結び付け、澄生の芸術が今に生きる唯一の道である。ところで澄生の膨大な作品は、現在残っているのだろうか。澄生自身の摺った作品が余す所なく系統的に集められ、良い状態で保存されている所はないか。ただ一つの答えは、長谷川勝三郎コレクションであった。

長谷川勝三郎は 1912 年（明治 45 年）麻と木工品の産地である栃木県鹿沼町で代々麻問屋を営む長谷川家に生まれた。1924 年（大正 13 年）、名家の子弟が通う隣町の宇都宮中学校に入学、これが川上澄生との出会いの契機となり、それからの人生の方向を決定づけることになる。その経緯を毎日新聞社刊行の『川上澄生／詩と絵の世界』所載の『川上澄生さんと私』に記している。

大正十三年、宇都宮中学（現宇都宮高校）一年生の日光遠足の時に、神社に千社札を一生懸命貼っていると、後ろから「君、こんな好きならば一度遊びに来なさい」と、引卒の先生から声をかけられた。この先生こそ。“ハリさん”事、川上澄生先生であった。

先生の止宿先、鶴田駅前「朴花居」は、六畳と四畳半の家で玄関もなく、廊下のガラス戸をあけて座敷にあがると、先生の座る一人分の空地があるだけ。あとは、本、コーヒー茶碗や身の回りの物で雑然としている。ここでコーヒーをご馳走になり、版画を見せてもらい、一目でとりこになり、「版画を教えてください」と強引に弟子第一号となった。

まじめな英語教師で、野球部の副部長として若い選手たちを夕方暗くなるまで指導と、お忙しい先生の暇を見て版画の手ほどきを受けた。やがて、同好の仲間と版画集「刀」を刊行したが、それは先生の作品がほしいばかりにであった。これらの作品は、小品ではあるが今では極めて珍しいものになっている。

先生の勧めで、東京高等工芸学校（現千葉大）に入学、卒業後は東京日日新聞社（現毎日新聞社）に入社、四十年にわたって新聞印刷に従事したのも、すべて先生の影響であるといっても過言ではない。

このように版画から新聞の印刷の道に入り、毎日新聞社の取締役印刷担当として東京本社印刷局長を歴任した。その間、特に展覧会出品作を中心に、質の高い澄生の作品を蒐集していった。それは、いつも師に対する尊敬を表わしつつ、控え目な態度で充分な対価を支払って、澄生の経済に寄与していた。その一つのケースが、1947年（昭和22年）6月25日北海道から塚田泰三郎宛の澄生の書簡に記されている。

それから「あいのもしり」を四十部、これも少しづつ刷って出来ました。これは三百円の値をつけるつもりで居ます 「えぞがしま」から割出すとその位になります これハ朝日の展覧会に出したもので伴君からの手紙によると皇太子殿下があゝの文句を読んで、眺めておられたといふことでした。で、これは限定三十部と明記してあるので三十部しか売りものにしないつもりですが実ハ二十九部売ることになります。展覧会出品物ハ

「一番」といふことにして千円としておいたところ長谷川勝三郎君が買ってくれたさうで金ももうすでに貰ひ一寸困っています。

展覧会の出品物に澄生が高価な値段を付けておいたところ、長谷川が無条件で支払ってくれたために、あとの作品を 300 円で出す事のためらっている様子が分る。勿論その辺の価格については充分承知の上で、この弟子は師に礼を尽くしたのである。このようにして蒐めた澄生の作品は、1985 年（昭和 60 年）頃には、2000 点を越えていた。

…以下、次のような章立てで美術館の開館と運営について詳細に描かれているので、興味のある方は本書を参照されたい。

美術館を作ろう  
研究調査と企画展をどう展開するか  
知名度を上げ鑑賞者を呼び込むには  
天皇皇后両陛下のご来館  
小さな経費 大きな満足度

また本書全体は次のような構成になっている。ぜひ本書もお読みください。

序 章	はつなつのかぜの誕生	1 1 章	家庭とは一つの情景であるか
1 章	ふるさととは文明開化	1 2 章	北海道に生きる
2 章	押し出されてカナダ	1 3 章	第二のふるさとへの帰還
3 章	アラスカで暮らすか	1 4 章	南蛮紅毛の世界
4 章	あなたの顔 ——芸術創造の熱源	1 5 章	究極の木版画空間 ——静物
5 章	月の出 ——詩の発想から版画へ	1 6 章	本の楽しみ
6 章	創作版画——表現技法の原点	1 7 章	友にして同志——塚田泰三郎
7 章	教員生活——その影と光	1 8 章	技法の伝授にみる創造原理
8 章	へっぽこ先生の日々	1 9 章	アラスカ物語 ——半世紀の時を越えて
9 章	棟方志功と すれちがう	2 0 章	川上澄生美術館の誕生
1 0 章	風景 ——閉ざされた空間の広がり		

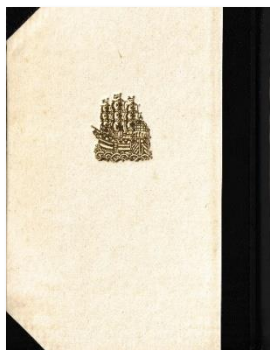
『履歴書』対照 川上澄生年譜

⑥ 師弟競作など

川上澄生「波囲み蛮船図」(昭和24年刻)



↓特装版「川上澄生全集」第三巻外函と装丁、↑付録として添付されている版画

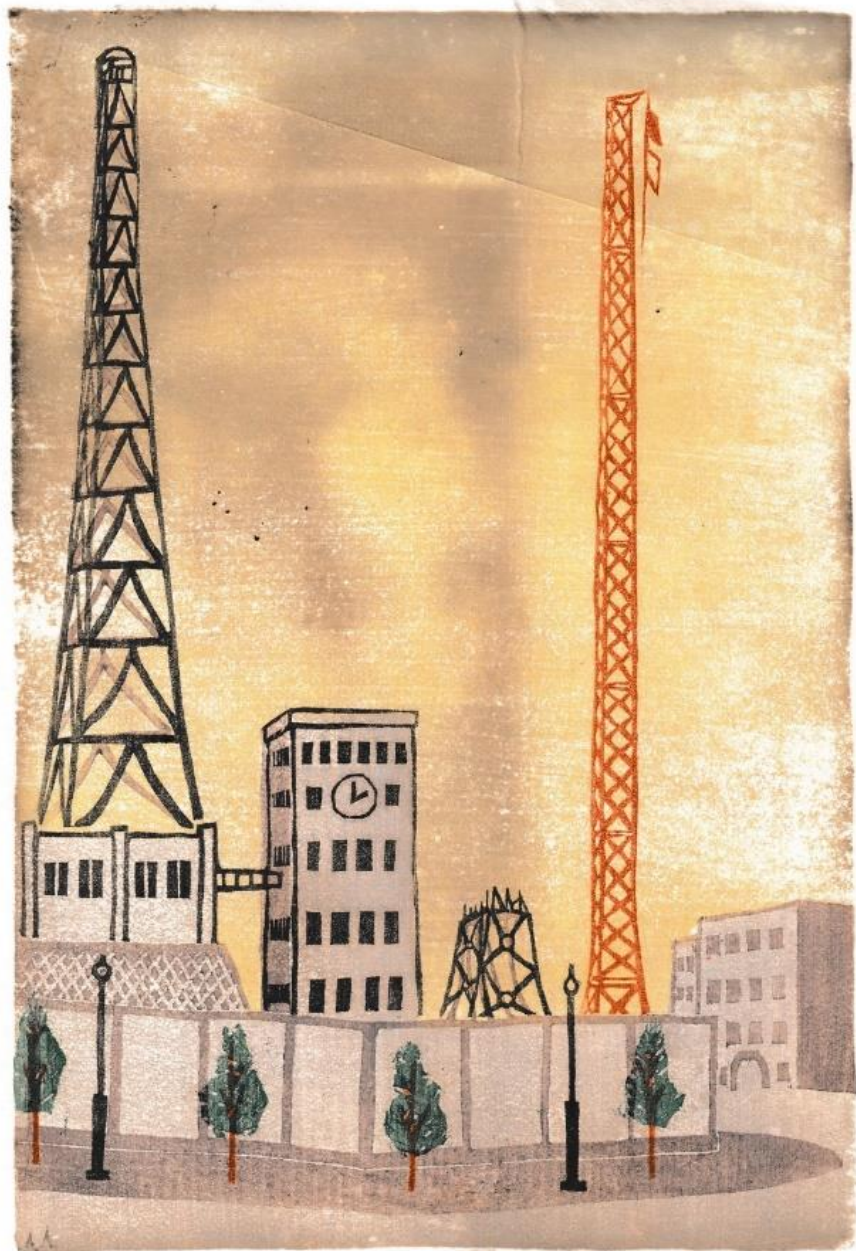


川上澄生全集特装版は限定380組。大きな函と外函に収められている。

第三巻には付録として手摺り版画「波囲み蛮船図」が添えられている。特装版としてはさほど凝った装丁でないものの、古書としての値が張るのは、この手摺り版画による。

(p.39 参照)

長谷川勝三郎「中央气象台風景」(昭和4年)





長谷川勝三郎賀状3点 (下澤木鉢郎宛)

〈昭和9年〉



〈昭和56年〉



〈昭和58年〉



※ 川上は昭和47年に逝去しているので、絵の部分は川上の遺した版木を使い、挨拶・住所部分は長谷川の自刻であろう。(森井書店古書目録による)

こんなシゴトも…



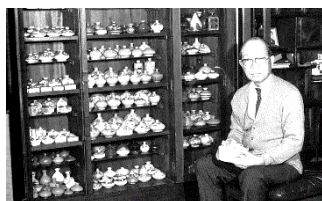
挿絵雑誌「えくらん」5号（昭和35年、えくらん社）より  
 同誌は昭和34年創刊。創刊号は当時の人気挿絵を並べて掲載しているだけだったが、号を追うごとに企画が充実。しかし創刊翌年の5号で休刊になったようである。  
 新協美術会と出版美術家連盟との両方に所属する画家で挿絵画家でもある3人（西原比呂志、久比佐夫、花房英樹）が中心になって編集を始めたかと思われ、表紙絵は西原と久が交互に描いている。西原比呂志（出版美術家連盟理事・新協美術会々員・日本童画会々員）は信州一味噺のキャラクター「み子ちゃん」の製作者としても知られる。  
 各界著名人の寄稿も多く、長谷川勝三郎の木版作品もこの号に「毎日新聞印刷局長」として掲載された（上右）。

⑦ こんな趣味も

「油壺」(第一銀行コレクションシリーズ・ほし9)

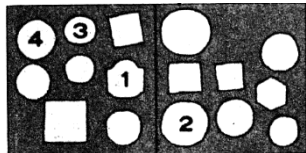
(1963年7月・第一銀行業務部企画課)

油壺は、昔の人々が髪油を入れるのに使ったもので、日常の実用品ですから、銘のはいったものもなく、高価なものでもありませんが、集めてみると、民芸品のもつ面白さ、昔の人々の生活の息吹きといったものか感じられて、なかなかたのしいものです。私は地方へ行くと、まず古道具屋を見つけて、油壺はないかと、あさるくせがついてしまいました。図に見るように、極彩色のもの、淡彩のもの、とりどりですが、口に金色の彩色をしているものなどは、比較的上流で用いられたものでしょう。



油壺コレクションの前に  
(1982年)

- 1 は古いもののようで、上下の間に継いだ跡らしいふくらみが、周囲を一周しています。
- 2 は異国情風の図柄で南蛮ものの九谷です。



- 3 は一番新しく、ごく最近のもので、油壺の形をとり入れた一輪ざしかとも思われます。
- 4 だけは、外国製のようなのですが、やはり油を入れたものでしょう。

長谷川勝三郎〈毎日新聞印刷局長〉



第一銀行発行のミニコミ誌「ほし」9号の表紙・裏表紙に展開するコレクションの一部

## ⑧ 89年の生涯を振り返る

### 長谷川勝三郎 年譜

\*本年譜は「長谷川勝三郎氏略歴」(『別冊新聞研究』第24号 社団法人日本新聞協会、1988年)、濱崎礼二、伊藤伸子編「作家略歴」(『版画をつづる 夢 一宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡ー』展図録 宇都宮美術館、2000年)、「長谷川勝三郎 略年譜」(『コレクター長谷川勝三郎と川上澄生』展図録 鹿沼市立川上澄生美術館、2005年)をもとに作成した。

#### 1912年(明治45)

2月9日、麻問屋を営む長谷川唯一郎の三男として栃木県鹿沼町大字鹿沼(現・鹿沼市久保町)に生まれる。自宅庭園「掬翠園」は現在、<sup>きくすいえん</sup>「屋台のまち中央公園」の一角にその一部が遺されている。父は自宅に日本画家の木村武山、小杉放菴、清水比庵らをまねき親交もあった。兄・榮一郎(黙念)は木喰仏の研究家としても知られる文化人、姉・フミ(宗召)は、県下唯一といわれた茶道宗偏流最高位の正教授であった。

#### 1924年(大正13) 12歳

4月、宇都宮中学校(現・栃木県立宇都宮高等学校)に入学。遠足先の日光で、自分で貼った「掬翠園」の千社札を神社に貼っている姿が引率の川上澄生の目に留まり、懇意となる。以後、鶴田駅前の川上澄生の自宅を頻繁に訪れ、木版画の指導を受けるようになる。

#### 1928年(昭和3) 16歳

宇都宮中学校の版画愛好の生徒たちと版画誌『刀』を創刊。以後、卒業するまでの通巻第4号まで責任編集を行う。卒業後も、川上澄生のすすめで通巻第8号(1930年)まで毎号作品を発表。

12月、北海道帝国大学(現・北海道大学)教授の服部光平のすすめで、札幌の詩と版画の同人誌『さとぼろ』第26号に作品を投稿、掲載される。

#### 1929年(昭和4) 17歳

3月、宇都宮中学校卒業。上京し、神田美土代町のYMCAに止宿。受験に備え、川上澄生の紹介で尾田勇にデッサンの指導を受ける。

この頃、川上澄生の紹介で平塚運一、深澤索一、藤森静雄、前川千帆、恩地孝四郎、川西英、小泉癸巳男、旭正秀、永瀬義郎、谷中安規、武井武雄など多くの版画家たちと知り合う。特に川西英とは前年から書簡のやりとりが確認される。

8月、版画情報誌『版画 CLUB』第4号に作品が掲載される。

9月、旭正秀、宮尾しげを、野村俊彦、松村松次郎の4名を同人として創刊

された版画誌『版画』（素描社発行）第2号に作品を発表。翌年の第5号では同人として作品を発表。

### 1930年（昭和5） 18歳

2月、版画情報誌『版画 CLUB』第2年第2号の「庚午版画年賀葉書集」に自画像が掲載される。

4月初め、小泉癸巳男と鹿沼の実家で過ごす。その様子を小泉癸巳男との連名で、大河内信敬に葉書にて書き送る。

同月、川上澄生のすすめで、東京高等工芸学校（現・千葉大学）印刷工芸科に入学。同校では木版画は教えていなかったが、石版、エッチングを始めとして、数々の印刷技術を学ぶ。在学中、同校の版画愛好の同志と版画誌『刀画』、『BALEN』を創刊。

この頃から翌年頃まで、近藤雅平、福田信二、宇都宮中学校時代の一級上である八木澤英三が創刊した版画誌『きくづ』に作品を発表。川上澄生、本多興花らとともに同人として参加。

夏、実家の別荘がある千葉県長生郡白潟海岸で過ごす。その地で、川西英からの葉書や、勝平得之、大河内信敬からの暑中見舞いを受け取る。

### 1932年（昭和7） 20歳

2月、版画情報誌『版画 CLUB』第4年第2号の「創作版画年賀葉書第1回誌上展」に作品が掲載。

6月、第2回日本版画協会展に《静物》、《風景》を出品。

12月、『版芸術』第9号「全日本版画家年賀状百人集」に作品が掲載。

### 1933年（昭和8） 21歳

3月、東京高等工芸学校卒業。その頃「東京日日新聞」に連載されていた中里介山の小説「大菩薩峠」の挿絵（石井鶴三作）に魅せられ、4月、東京日日新聞社（現・毎日新聞社）に入社。

12月、『版芸術』第21号「創作版画年賀状傑作集」に作品が掲載。

この頃より、九段下の神保町寄りにあった井上美術店に足繁く通い、川上澄生の作品や、その他の版画家の作品を買い求める。

### 1935年（昭和10） 23歳

この年、武井武雄主宰の自作版画の年賀状交換会「版交の会」（第3回より「榛の会」と改称）の会員となり、翌年の第2回まで参加する。

### 1942年（昭和17） 30歳

マニラ新聞工務部次長に就任。

### 1943年（昭和18） 31歳

セレベス新聞工務部長に就任。

1945年（昭和20） 33歳

毎日新聞東京本社技術部長に就任。

1954年（昭和29） 42歳

米国新聞技術視察（3ヶ月）。

1968年（昭和43） 56歳

毎日新聞社取締役印刷担当並びに東京本社印刷局長に就任。

1971年（昭和46） 59歳

毎日新聞社を退社。3月、日本新聞インキ株式会社顧問に就任。

1972年（昭和47） 60歳

日本新聞インキ株式会社代表取締役社長に就任（1982年より会長、1986年より相談役）。

1983年（昭和58） 71歳

日本書票協会会長に就任（1986年まで）。

1984年（昭和59） 72歳

勲四等瑞宝章受章。

1987年（昭和62） 75歳

聖教文化賞を受賞。

1988年（昭和63） 76歳

毎日新聞社顧問に就任。

1992年（平成4） 80歳

蒐集した川上澄生の全作品を鹿沼市に提供し、

9月、鹿沼市立川上澄生美術館開館。

名誉館長に就任。

1995年（平成7） 83歳

10月12日、鹿沼市立川上澄生美術館にご来館の天皇皇后両陛下を案内する。

2001年（平成13） 89歳

8月28日、逝去。享年89歳。



毎日新聞社視察の華子様の説明  
（1957年6月27日）

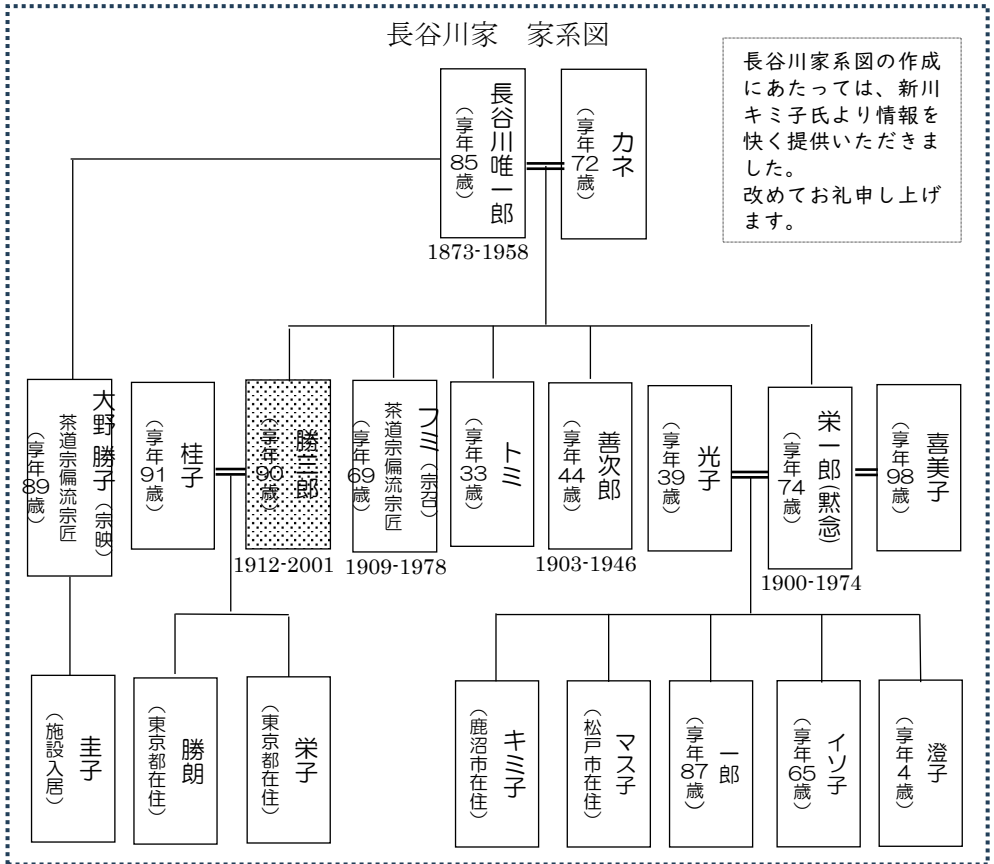


美術館に天皇皇后両陛下をお迎えする  
（1995年10月12日）



# 長谷川家の人々

## 長谷川家 家系図



### ◎ 著書・著作目録・関係資料（阿部所蔵）

#### ○ 著書

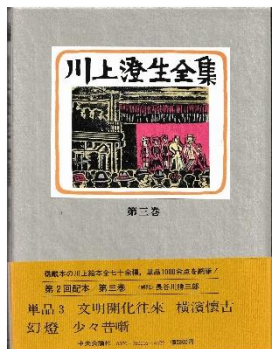
『澄生さんと私』（こつう豆本 124）（平成 9 年 1 月 30 日・日本古書通信社）  
→3 ページをご覧ください。

#### ○ 寄稿文

#### 「澄生熱愛者の弁」

（季刊「銀花」第 11 号）（昭和 47 年 9 月 30 日・文化出版局）  
（季刊「銀花」川上澄生追悼版）（昭和 47 年 10 月 5 日・文化出版局）  
→7 ページをご覧ください。

「川上澄生さんの事」(川上澄生全集 第三卷)



(昭和 53 年 11 月 20 日・中央公論社)

(川上澄生全集全 14 巻の各巻にそれぞれ識者による解説が添えられており、勝三郎は第三巻を担当した) →31 ページもご覧ください。



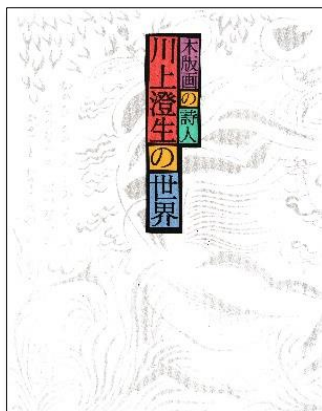
「川上澄生さんと私」(川上澄生美術館責任編集『川上澄生／詩と絵の世界』)

(1995 年 10 月 12 日・毎日新聞社)

「川上澄生さんのこと」(東京ステーションギャラリー「川上澄生の世界」)



1996 年 4 月 6 日～5 月 19 日・財団法人東日本鉄道文化財団)



「油壺」(第一銀行コレクションシリーズ・ほし9) (1963 年 7 月・第一銀行)  
→34 頁をご覧ください。



「紙型法について～主として圓壓式による」→  
(日本新聞協会編集部編「新聞講座 工務編」)  
(昭和 23 年 12 月 1 日・日本新聞協会)



← 「川上澄生さんの版画絵本について」  
 (「これくしょん」第77号  
 川上澄生本・特集 (通巻 136号))  
 (昭和 55年 11月 20日・ギャラリー吾八)

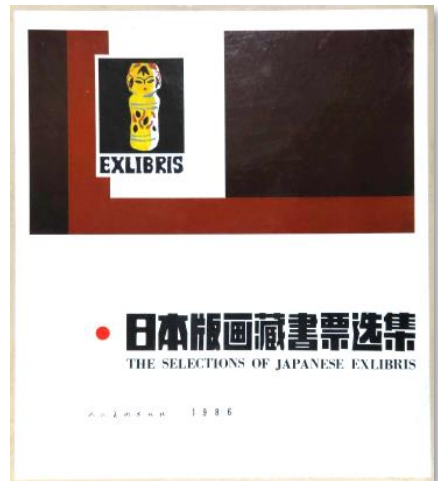
「川上澄生さんの絵本」→  
 (これくしょん第27号  
 特集・川上澄生さんの絵本  
 (通巻 200号))  
 (平成 5年 12月・吾八書房)



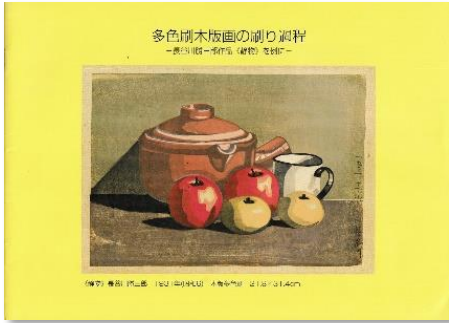
← 「今村秀太郎さんを偲んで」  
 (これくしょん第29号  
 追悼・今村秀太郎 (通巻 202号))  
 (平成 6年 7月・吾八書房)

「日本版画蔵書票選集」→  
 (1985年 11月)

版画・蔵書票による国際交流が盛んになり、関連する日中友好行事や出版が繰り広げられていた 1984 年頃、当時「日本書票協会」会長を務めていた長谷川勝三郎らが尽力して日本の作家 55 名による作品 852 点と資料を集め、中国に寄贈した。これを記念して、中国で刊行された作品集。







○ その他

小林利延『評伝 川上澄生』(2004年  
3月7日・下野新聞社)  
→28ページをご覧ください。

←長谷川勝朗  
「多色刷木版画の刷り過程  
～長谷川勝三郎作品〈静物〉を例に～」  
(2006年7月10日  
・鹿沼市立川上澄生美術館)

**鹿沼市立川上澄生美術館図録** (刊行順)

↓「川上澄生さんと私」

(鹿沼市立川上澄生美術館開館記念特別展「若き日の川上澄生」  
1992年9月8日～12月6日)



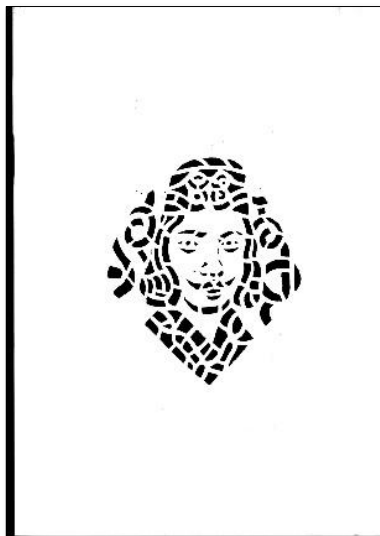
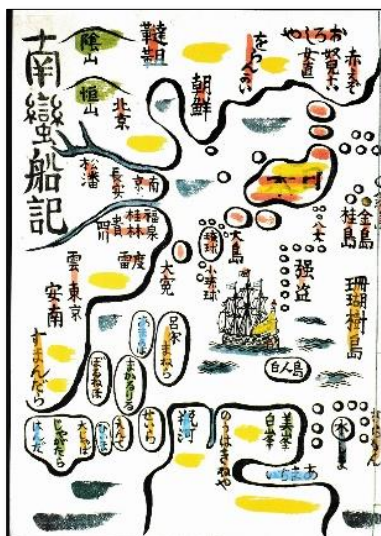
↑「川上澄生のガラス絵と肉筆画について」↑  
(鹿沼市立川上澄生美術館開館記念展「ガラス絵と肉筆の川上澄生」  
1992年12月23日～1993年3月21日)

↓「川上さんの南蛮船」

(鹿沼市立川上澄生美術館企画展

「南蛮の川上澄生」

1993年4月20日～9月19日)



↑「北海道の川上澄生さん」

(鹿沼市立川上澄生美術館企画展

「北海道の川上澄生」

1993年11月2日～1994年1月30日)

↓「文明開化」と川上澄生さん」

(鹿沼市立川上澄生美術館生誕百年記念企画展

「文明開化の川上澄生」1995年4月8日～8月31日)



○ 以下、長谷川勝三郎没後の企画展図録

川上澄生生誕 110 周年

コレクター長谷川勝三郎と川上澄生  
(2005年10月・鹿沼市立川上澄生美術館  
発行) →13 ページをご覧ください。

開館 20 周年記念特別企画展

創作版画の宝石箱  
川上澄生・武井武雄・川西 英・谷中安規  
…—コレクター長谷川勝三郎の眼—  
(2012年・鹿沼市立川上澄生美術館発行)  
→18 ページをご覧ください。

## 写真に見る郷土の昔の風景



帝国製麻(株)鹿沼東工場から西方に鹿沼市街を望む（昭和 25 年頃）  
中央を黒川が流れ、府中橋（左端）、睦橋（中央、近年流失）が見える  
睦橋を渡った所に現在、川上澄生美術館が建っている  
（昭和 25 年度帝国製麻(株)事業概要より）

## あとがき

長谷川勝三郎の生涯については、鹿沼市立川上澄生美術館発行の企画展図録『コレクター長谷川勝三郎と川上澄生』『創作版画の宝石箱』に、勝三郎の長男、長谷川勝朗氏がそれぞれ「川上澄生と長谷川勝三郎」「長谷川勝三郎と創作版画の仲間たち」を書かれており、この転載については新川キミ子さんを通して筆者本人の承諾をいただきました。また、鹿沼市立川上澄生美術館発行の図録など数々の出版物から、勝三郎の著作、作品、年譜などを転載させていただきました。鹿沼市立川上澄生美術館に対し、巻末ながら、厚くお礼申し上げます。

長谷川勝三郎の兄は長谷川栄一郎（黙念）。新川キミさんは栄一郎の四女。栄一郎は本誌第 4 号で取り上げた長谷川唯一郎の長男、勝三郎は三男である。本誌第 5 号「長谷川唯一郎」は栄一郎の著書「父を語る」の存在によって実現した。栄一郎は東京製綱鹿沼工場長で、大麻の研究、木喰上人の研究でも知られる文化人である。「父を語る」以外にも、いくつかの著作が見つかったので、いつか「長谷川栄一郎」も特集できれば、と思っています。

（阿部良司）

☪ 本号の内容 ☪

まえがき	2
長谷川勝三郎『澄生さんと私』より	3
長谷川勝三郎「澄生熱愛者の弁」	7
「コレクター長谷川勝三郎と川上澄生」	13
「創作版画の宝石箱」	18
小林利延『評伝 川上澄生』より	28
師弟競作（川上澄生「波囲み蚕船図」長谷川勝三郎「气象台風景」）他	31
「油壺」	34
長谷川勝三郎 年譜 他	35
著書・著作目録・関係資料	38
写真に見る郷土の昔の風景	43
あとがき	43



鹿沼に生きた人、生きている本・第7号

2024年4月発行

小さな旅クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町 1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☒ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail abeclean@gmail.com